

短時間学習を意識した初級日本語教材の開発とその効果

－初級漢字教科書『留学生のための毎日のKANJI』－

濱田美和・高島智美・市島佑起子

Development of Beginner's Japanese Learning Resources for Short Intensive Study and the Effects: A Beginner's Kanji Textbook "Everyday KANJI for International Students"

HAMADA Miwa, TAKABATAKE Tomomi, ICHISHIMA Yukiko

要 旨

日本語教育において、漢字教育は重要である。漢字は語彙の習得とも関連するものであり、また、日本で生活する留学生の多くは、至る所で漢字を目にするため、習得の必要性を強く感じている。一般に、集中日本語コースでは漢字の体系的な指導がなされているが、コース内で十分な時間が確保できない場合、文型や語彙の習得に重点を置いて指導がなされるため、漢字は学生が自ら学ぶしかない状況にある。これには、教室における短時間指導に適した漢字教材の不足も関連していると思われる。筆者らは、専門の学習等で多忙な留学生のために、新たに短時間学習型の初級漢字教科書『留学生のための毎日のKANJI』を開発した。本教材の特徴として、教室における短時間での導入に適している点、また、学生が自学自習しやすい工夫を行った点が挙げられる。本教材による漢字指導を始めた結果、非漢字圏の学生だけでなく、漢字圏の学生からも一定の評価を得ることができた。

【キーワード】 漢字、教科書、初級クラス、短時間学習、自学自習

1 『留学生のための毎日のKANJI』開発の経緯

日本の大学で学ぶ外国人留学生の多くは、専門の学習や研究を行いながら、多忙な中、日本語のクラスに参加している。そのため、短時間で効率的に、大学で必要性の高い日本語を習得できるようなコース運営が求められる。また、日本語のクラスに継続して出席できない学生や、予習や復習に十分な時間をかけることができない学生のために、自学自習がしやすい環境を整えることも重要である。

富山大学留学生センター「日本語課外補講」は、初級、中級、上級、3つのレベル別クラスを前期、後期にそれぞれ15週、開講している。「日本語課外補講」は大学院生や研究生、短期留学生を主な対象としており、受講者は専門の授業等がない時間帯のみ日本語の授業に出席しているため、各レベルで開講している科目をすべて取ることができない学生も多い。

このうち、日本語を初めて学ぶ学生のための初級クラスは、週10コマ（1コマ90分）の「文法」の授業（『みんなの日本語 初級』1, 2（スリーエーネットワーク）を主教材とし、語彙や文型の導入後、会話、聴解、読解等の基本練習を実施）と週1コマ「聴解」の授業（聴解を中心とした応用練習を実施）で構成される。2005年度まではさらに、初級～上級クラスの共通科目として「漢字」の授業も週1コマ受講できるようになっていたが、「日本語課外補講」受講者に対して每期実施しているアンケートの中で、初級クラスの受講者から、「毎日の授業で5分か10分、漢字を教えると、学生は覚えやすくていいと思う。」「毎日のクラスで漢字を勉強したらいいと思う。たとえば、1日10個漢字を勉強したら、漢字を知らない学生にとってもいい。漢字の授業は週1回だけで、少ないと思う。」といった漢字指導に関する意見が複数寄せられた。初級クラスの非漢字圏の学生の多くは英語を用いて研究を行っているが、日本で生活を送る中では漢字を目にする機会が多く、漢字習得の必要性を強く感じていることが窺われる。学生の意見に見られるように、漢字を初めて学ぶ学生にとって週1回の授業で多くのことをまとめて学ぶというのは負担が大きく、加えて、時間的制約から「漢字」の授業に出席できない学生がいたことも、

「毎日の授業の中で漢字を学びたい」という要望が出てきたことに深く関与しているのではないかとと思われる。

そこで、2005年度より、漢字未習者が徐々に漢字を習得できるよう、初級クラスにおける漢字の指導体制を見直し、初級クラスの「文法」「聴解」の授業を利用して、週2～3回漢字の指導を短時間で行うことにした。短時間で漢字を導入するためには、学生のニーズに合わせ、漢字や語彙を精選した教材が必要である。初級日本語の教科書には漢字導入に配慮したものもあり、それらを主教材に使用することも考えられるが、これは容易にはできない。主教材の変更はコース全体のカリキュラムにも影響するものであり、加えて、初級クラス「文法」は大学院入学前予備教育である「日本語研修コース」と週3日合同授業となっているからである。またこれらの教科書は、一般に文型や語彙の導入に焦点を当てて作成されているため、漢字の体系的な指導を行うにはあまり適していないという問題もある。一方、漢字に焦点を当てた教材については、日本語学習者向けの優れた漢字教科書や参考書は多くあるが、既存の初級漢字教科書のうち、留学生に適したものは、導入にある程度の時間を要するものであり、短時間での指導用教材としては必ずしも適当とは言えない。また、「日本語課外補講」を受講する学生は、専門の授業等のために毎回クラスに出席できない学生も多く、自学自習にもある程度対応できる内容の教材が必要である。

以上のような理由から、新たな独自教材の開発の必要性を感じ、初級漢字教科書『留学生のための毎日のKANJI』を作成するに至った。そして、初級クラスで本教材を用いた漢字の授業を1年間行った結果、一定の効果が見られたため、初級～上級クラスの共通科目としていた「漢字」の授業を、2006年度前期から、中級～上級クラスの共通科目に変更した。これにより「漢字」の授業における受講者の習得レベル差の緩和にも役に立った。

本稿では、初級漢字教科書『留学生のための毎日のKANJI』の概要と特徴、そして、クラスにおける本教材の使用状況および効果について報告する。

2 『留学生のための毎日のKANJI』の概要

2.1 学習目標

本教材は、専門の学習や研究などで忙しく、日本語の学習に十分な時間を割くことのできない学生が、無理なく日本語の学習を継続していけるよう支援することを目指している。『留学生のための毎日のKANJI』は、Vol.1とVol.2の2巻から成り、この2巻で日本語能力試験3級レベルの漢字を網羅している。

『留学生のための毎日のKANJI, Vol.1』（以下、『Vol.1』と記す）は初級クラスの授業で使用するために作成したものである。『Vol.1』の学習目標は、漢字を初めて学ぶ学生が、

- 1) 漢字の書き方、文字の組立て、音訓など、漢字に関する基礎的な知識を体系的に学ぶこと
- 2) 15週のコースを終える段階において、1)の内容を学ぶために必要な漢字、および日常生活や大学生活で必要度の高い漢字120字を習得すること
- 3) 1), 2)を通し、継続して漢字学習に取り組んでいくための素地を確立すること

である。

『留学生のための毎日のKANJI, Vol.2』（以下、『Vol.2』と記す）は、初級クラスの授業で『Vol.1』を用いて漢字に関する基礎的な知識を習得した学生が、初級クラス終了後も漢字学習を継続しやすいように、『Vol.1』と同様の形式で作成したものである。『Vol.2』では、日常生活や大学生活で必要度の高い初級レベルの漢字172字を習得することを学習目標としている。

2.2 漢字の選定

『Vol.1』では、日本語学習における入門レベルの漢字として日本語能力試験4級レベルの漢字表の103字を採用し、これに以下の基準により¹⁾ 17字を加え、計120字を選定した。

- 1) 部首等, 他の漢字の構成要素として用いられる漢字: 田, 門 (日本語能力試験 3 級レベル)
- 2) 日常生活で使用頻度の高い漢字: 市, 住, 所, 屋, 明 (日本語能力試験 3 級レベル)
番, 号 (日本語能力試験 2 級レベル)
- 3) 大学生活で使用頻度の高い漢字: 研, 究, 教, 室 (日本語能力試験 3 級レベル)
留, 部, 院 (日本語能力試験 2 級レベル)
- 4) 富山の生活で使用頻度の高い漢字²⁾: 富 (日本語能力試験 2 級レベル)

『Vol.2』では, 初級レベルの漢字として日本語能力試験 3 級レベルの169字 (3 級レベルの漢字表にある284字のうち, 『Vol.1』で扱った 4 級レベルの103字と 3 級レベルの12字を除いた漢字) を採用し, この169字に, 「大学生活で使用頻度の高い漢字」という基準により, 日本語能力試験 2 級レベルの「授」「科」「期」の 3 字を加え, 計172字を選定した。

2.3 全体構成

『Vol.1』は全40課, 『Vol.2』は全43課から成り, それぞれ表 1, 表 2 のような構成とした。

本教材は, 教室における短時間での指導を行うことを第一の目的として開発したものであるが, 非漢字圏の学生の場合, 漢字に慣れるまでは書字指導にある程度の時間を要する。そこで, 最初は, 画数の少ない漢字から, 横画, 縦画, 払いなどの基本画の書き方を徐々に学べるよう, 字の形により漢字を配列した。また, L14~L19では漢字の成り立ちや文字の組立てを学生が意識化できるよう, 象形文字, 指示文字, 会意文字をまとめた。これ以外は, 漢字および漢字熟語の意味や品詞により, 漢字を分類し, 学生が覚えやすくなるように心がけた。ただ, その際も, 部首等, 他の漢字の構成要素として使われる漢字ができるだけ先に学べるよう, あるいは, 漢字の音訓の語例にできるだけ既出の漢字が使えるよう提出順を検討した。日本語学習者に対する漢字教育に関する先行研究においても, 学習者が挙げる漢字学習の困難点として, 漢字の「記憶」「記憶保持」ということがある (豊田1995など) が, 特に初めて漢字を学習する非漢字圏の学習者は「漢字間に形態的, あるいは意味的共通性を見出し, それらをグループにまとめて覚える」というストラテジーを頻繁に用いているとする調査報告もあり (伊藤・和田2004 p.125), 本教材も漢字の記憶という面で, 有効な配列になっていると言えるだろう。

表 1 『留学生のための毎日のKANJI, Vol.1』の全体構成

課	分類の基準	提出漢字
L1~L10	基本画の書き方および筆順の原則を習得するための漢字	L1 横画: 一, 二, 三 L2 縦画: 十, 土, 山 L3~L4 払い: 川, 八, 人, 大, 木, 本 L5 折れる画: 口, 日, 田 L6 はね: 小, 水, 月 L7 曲がりとはね: 九, 花, 先 L8~L10 点: 火, 金, 来, 六, 市, 立, 国, 魚, 雨
L11~L13	数を表す漢字	四, 五, 七, 百, 千, 万, 円, 何, 年
L14~L19	象形文字, 会意文字等, 漢字の成り立ちや文字の組立てを学ぶための漢字	目, 耳, 手, 足, 門, 車, 子, 女, 男, 生, 学, 休, 上, 下, 中, 右, 左, 間
L20~L22	時間表現に関わることばに使われる漢字	時, 分, 半, 週, 毎, 今, 午, 前, 後
L23~L26	基本動詞に使われる漢字	見, 聞, 言, 書, 読, 話, 食, 飲, 買, 入, 出, 行
L27~L33	自己紹介や書類記入の際に必要なことば, 大学生活に関わることばに使われる漢字	名, 住, 所, 電, 番, 号, 父, 母, 友, 会, 社, 校, 留, 富 ³⁾ , 語, 研, 究, 院, 部, 教, 室
L34~L36	方向や場所を表すことばに使われる漢字	東, 西, 南, 北, 道, 駅, 店, 屋, 外
L37	天気に関わることばに使われる漢字	天, 気, 空
L38~L40	基本形容詞に使われる漢字	新, 古, 白, 長, 高, 安, 多, 少, 明

表2 『留学生のための毎日のKANJI, Vol.2』の全体構成

課	分類の基準	提出漢字
L41~L44	時間表現や季節に関わることばに使われる漢字	朝, 昼, 夕, 夜, 春, 夏, 秋, 冬, 去, 曜, 方, 度, 暑, 寒, 早, 暗
L45~L46	親族表現に関わることばに使われる漢字	私, 家, 族, 主, 兄, 姉, 弟, 妹
L47~L49	料理, 食べ物, 動物に関わることばに使われる漢字	料, 理, 飯, 茶, 味, 野, 菜, 肉, 牛, 鳥, 犬, 好
L50	身体に関わることばに使われる漢字	体, 力, 心, 持
L51~L56	大学生生活に関わることばに使われる漢字	科, 期, 試, 験, 質, 問, 題, 答, 注, 意, 用, 紙, 文, 字, 漢, 英, 勉, 強, 習, 説, 授, 業, 工, 産
L57	数や計算に関わることばに使われる漢字	合, 計, 以, 代
L58~L63	基本形容詞に使われる漢字 (「色」は例外, 色彩形容詞とまとめた。)	元, 親, 切, 有, 不, 便, 特, 別, 同, 正, 悪, 弱, 近, 遠, 広, 低, 重, 軽, 太, 短, 色, 赤, 青, 黒
L64~L71	基本動詞に使われる漢字 (「仕」「事」は例外, 「働」「帰」とまとめた。)	思, 考, 知, 死, 借, 貸, 送, 売, 進, 止, 始, 終, 開, 回, 引, 動, 歩, 走, 待, 乗, 発, 着, 集, 急, 起, 洗, 作, 使, 事, 仕, 働, 帰
L72	乗り物に関わることばに使われる漢字	自, 転, 運, 通
L73	品物に関わることばに使われる漢字	物, 品, 洋, 服
L74~L75	趣味に関わることばに使われる漢字	映, 画, 写, 真, 音, 楽, 歌, 旅
L76	身体部位を表すことばに使われる漢字	頭, 顔, 首, 声
L77~L78	病院や人々に関わることばに使われる漢字	病, 薬, 医, 者, 員, 民, 世, 界
L79~L81	場所や建物に関わることばに使われる漢字	県, 都, 区, 京, 建, 図, 館, 堂, 場, 地, 町, 村
L82~L83	自然に関わることばに使われる漢字	林, 森, 海, 池, 風, 台, 光, 銀

また, 自学自習用としても本教材を使用しやすいよう, 巻末に練習問題の解答ページを加えた。さらに, 『Vol.1』では本冊とは別に, 授業で使用するための10課ごとの復習テスト, そして, 学生が復習用の漢字カードを簡単に作成できるよう Web 上 (<http://www.isc.u-toyama.ac.jp/~hamada/kanji.html>) に漢字カードのPDFファイル(A4用紙両面11枚, カード330枚分)を用意した。漢字カードは, 表面に当該漢字を用いた語とその漢字の導入課, 裏面に読み方と英訳が印刷できるようになっている。(図1)

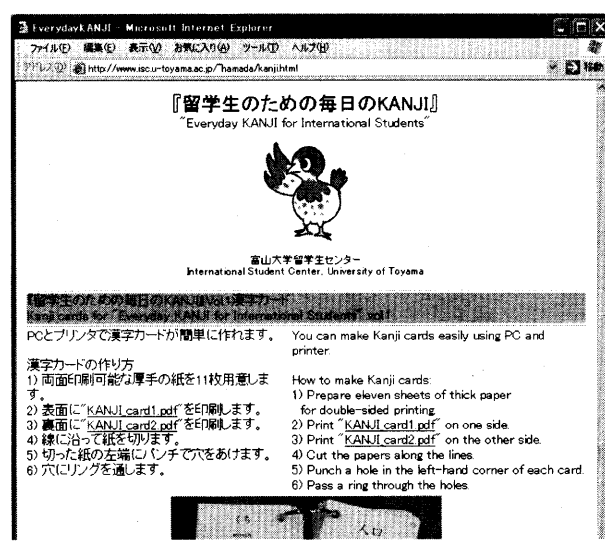


図1 漢字カードPDFダウンロード用Webページ

2.4 各課の構成

『Vol.1』は各課3字, 『Vol.2』は各課4字とし, 一つの課が見開き2ページで完結している。これは, 学生の負担感を軽減し, 意欲的に漢字学習に取り組めるように配慮したものである。各課は, 漢字について学ぶページ(左ページ)と練習ページ(右ページ)から成っている。(図2, 図3)

漢字について学ぶページには、筆順、字義の英訳、漢字の音訓、当該漢字を用いた語とその英訳を載せた。一部の漢字には、学生が漢字を覚える際の助けとなるよう、漢字の成り立ち等を示したイラストを入れた⁴⁾。『Vol.1』においては、筆順は一画ずつすべて載せ、その該当部分に「sweep (払い)」「hook (はね)」等の書写上のポイントも加え、初めて漢字の書字練習を行う学生が漢字の点画の書き方や筆順を確認しやすくした。『Vol.2』においては、「日」「土」「ㇿ」等の基本的な部首や構成要素の筆順は習得できていると想定されるため、ある程度まとまった単位で筆順を示した。さらに既習の漢字の部首や構成要素を組み合わせることにより、新出漢字の大半が書けることを学生に意識化させるために、例えば「春」は「三 + 人 + 日」、「暑」は「日 + 土 + ノ + 日」といった組立て方に関する情報も、筆順の横に加えた⁵⁾。

漢字の音訓については、使用頻度が少ない読み（「目」の音読み「ボク」および訓読み「ま」、「夕」の音読み「セキ」等）については掲載しなかった。また、当該漢字を用いた語例は、音訓それぞれ3語以内とし、語の選定は、初級クラスの主教材である『みんなの日本語 初級』の語彙、日本語能力試験3級レベルの語彙、および『語彙別 漢字基準表』レベルD・Cの語彙を参考に初級レベルの基本語彙を選び、これらに大学生活に必要な語（前期、研究室、教授、学会等）および富山での生活に必要な語（北陸、富山市、立山、市電等）を加え、また、多少難易度が高い語についても、漢字の意味によって語の意味の推測が行いやすい語（飲食店、出国、西部、本店等）は、漢字が意味を表すことを学生に意識化させるために適宜取り入れた。音訓ともに3語以内に絞ったため、例として掲載できなかった重要語彙については、練習ページあるいは漢字カードに載せることにより補った。そして、動詞については、初級クラスの主教材である『みんなの日本語 初級』では新出語彙の動詞の形として「ます形」が採用されているため、本教材においても「ます形」を用いることとした。

練習ページには、各漢字の書写練習の枡、語あるいは句単位での読み練習（各課4～9問）、文単位での読み練習（各課2問）および書き練習（各課3問）から成っている。これらの練習問題に用いる文や語は、初級クラスのシラバスに沿って、徐々に難易度が上がっている。

3 『留学生のための毎日のKANJI』の特徴

本教材の作成にあたり、もっとも重視した点は、日本語の学習にまとまった時間を取れない学生のために、教室における短時間での指導が可能な教材とすることである。そして、漢字の習得には、教室外での復習も欠かせないため、短時間での復習がしやすい教材とすること、さらには、毎日日本語の授業に出席することができない学生も多いため、自学自習しやすい教材とすることを目指し、開発を行った。具体的には、以下のような点を工夫した。

第一点目として、本教材で扱う漢字数および語彙数を制限した点が挙げられる。まず、漢字数については、学生が大きな負担を感じることなく、意欲的に漢字学習に取り組めるよう、『Vol.1』では1課の漢字数を3字、教科書全体の漢字数を120字、『Vol.2』では1課の漢字数を4字、教科書全体の漢字数を172字と制限した。また、『留学生のための毎日のKANJI』をVol.1とVol.2の2巻に分け、学生が教科書を1冊学習し終えた達成感を持ちやすくした。次に、語彙数についても先に挙げた漢字数と同様、学生の負担感を軽減するため、また、教室における導入時間を短縮するため、音訓ともに3語以下に制限した。そして、扱う語彙は授業で既習のものを中心に上げた。

第二は、漢字の提出順序についてである。1課5～10分程度という短い指導時間を想定していることから、『Vol.1』の冒頭部分は、漢字を初めて学習する非漢字圏の学生への書字指導が円滑に行えるよう、字形の単純な字から導入し、漢字の基本的な書き方、たとえば、横画の書き方、縦画の書き方、払いの書き方、点の書き方などを、順を追って学べるような配列とした。その後は、漢字および漢字熟語の意味や品詞による分類を行い⁶⁾、新出漢字の構成要素や語例に、できるだけ既出漢字が使えるように配慮しながら、配列した。

第三は、漢字と語彙の選定についてである。富山大学で学ぶ留学生を対象に作成した教材であるため、

富山で大学生活を送る中で目にする機会が多い漢字や漢字熟語については、一般的に難易度が高いとされるものでも採用し、利用者のニーズに、より即した内容とした。

第四は、練習問題についてである。本教材は「日本語課外補講」初級クラスでの使用を前提とし開発していることから、当クラスのシラバスを考慮した上で、練習問題文の難易度を決定した。これにより、本教材は、漢字の学習だけでなく、既習の語彙や文型の定着の促進にも役立つものとなっている。また、練習問題の解答を巻末に付けてあるため、練習問題部分は自宅での復習用として用いることも可能である。また、授業へあまり出席できない学生が一人でも学べるように、解答には、すべて英訳を入れる予定で、現在作業を進めている⁷⁾。

第五は、補助教材についてである。既に作成済みのものとして、『Vol.1』用の漢字カードを作成するためのPDFファイルをWeb上で提供している(2.3を参照)。本来ならば学習者自身が漢字カードを作成したほうが、漢字の記憶の促進に、より効果を発揮すると思われるが、日本語の学習時間が十分に取れない学生にとっては、漢字カードを作る時間もなかなか取れないことが多いため、補助教材として提供することにした。先行研究にも、漢字学習を始めたばかりの学生にとってのカードの有効性が述べられている⁸⁾。実際に筆者らは、文字の学習に不慣れな学生から、漢字の学習方法について相談を受け、この漢字カードの使用を勧めたところ、覚えるのに大変役に立ったとの報告を受けた。なお、まだ計画中の段階ではあるが、教室外における漢字学習を支援するため、Web上で本教材に即した内容の練習問題の提供を行う予定である。問題をランダムに提出でき、即時フィードバックが可能なWeb教材は、自学自習しやすい環境の整備に資するところは大きいと思われる。

以上のように、本教材は、短時間学習を目的として開発したため、教科書に掲載する内容はかなり絞り込んだものとなっている。本教材はあくまで日本語の学習に十分な時間が割けない学生に対して、彼らが漢字の学習に慣れるまで、教室において短時間で指導することを目的に作成したものである。このことは、逆に、日本語の学習にある程度の時間や労力を注ぐことのできる学生には、内容的に物足りなさを感じさせる恐れがある。漢字の指導に十分な時間が取れる場合は、他の豊富な内容を扱った漢字教材を用いたほうがより効果的であろう。本教材を使用する際には、この点に注意が必要である。

4 『留学生のための毎日のKANJI, Vol.1』の授業での使用状況および効果

2005年度前期より富山大学留学生センター「日本語課外補講」初級クラスにおいて、『Vol.1』を使用した漢字教育を始め、これまで3期にわたり、非漢字圏の学生6人(バングラデシュ4人、ブラジル、マレーシア各1人)、漢字圏の学生10人(中国10人)に対し、漢字の指導を行った。

当初は、月曜日から金曜日まで毎日1課進める計画で教材の開発に当たったが、2005年度前期より、初級クラス11コマのうち、6コマを「日本語研修コース」初級クラスとの合同授業とすることになり、「日本語研修コース」では『BASIC KANJI BOOK』VOL.1を用いた漢字指導の時間が別に設けられているため、「日本語課外補講」単独授業の中で、コース開始後5週目から、週2～3回、1回の授業で1課ないし2課進めることにした。初級クラスでは、文法、語彙、作文、聴解、会話に関する定期試験を2～3週間に1回実施しているため、試験がある週は漢字指導の時間を少なくしている。漢字については、この定期試験とは別に、10課ごとに確認テストを行っている。表3に詳細を示す。

表3 日本語課外補講初級クラスにおける漢字指導のスケジュール(2006年度前期)

1週目	(かなの指導)	6週目	L6～L8	11週目	L21～L25
2週目	(かなの指導)	7週目	L9～L12, テストL1～L10	12週目	L26～L28
3週目	(かなの指導)	8週目	L13～L15	13週目	L29～L34, テストL21～L30
4週目	(かなの指導)	9週目	L16～L18	14週目	L35～L37
5週目	L1～L5	10週目	L19～L20, テストL11～L20	15週目	L38～L40

本教材の特徴として、短時間で指導が行える点、自学自習を行いやすい点を挙げたが、実際に授業で使用したところ、練習問題を一部宿題にする等の方法を取れば、1課を5分で指導することも十分可能であることがわかった。また、初めて漢字に触れる学生もあまり負担を感じずに学べたようである。専門の学習や家庭の事情により、初級クラスの授業を欠席しがちであった非漢字圏の学生が数名いたが、漢字の学習は続けやすかったようで、中には、コース終了時に欠席日の漢字テストの受験を希望する学生もいた。初級の文法・文型の学習は、基本的に積み上げ式になっていることもあり、また内容的にも自学自習では難しい面があるのに対し、漢字の学習は、漢字に関する基本知識の習得後は、ある程度一人で学習することも可能であり、学習成果も見えやすい。日本語を学習する時間を十分に取れない学生にとって、授業の中で漢字の指導を組み込むことは、負担を増すことにつながるかもしれないという不安もあったが、これまでの学生の様子からは、逆に日本語学習の動機付けの一助として機能するほうが強いのではないかと感じられた。

また、いずれの期もクラスには非漢字圏の学生と漢字圏の学生が混在していたため、実際の指導は、新出漢字の音訓および語彙の確認までは一斉に行うが、その後は、非漢字圏の学生と漢字圏の学生とで分けて指導することが多かった。基本的に非漢字圏の学生へは漢字の書写練習を中心に、漢字の書字指導を丁寧に行い、練習問題は部分的に宿題にするなどして対応している。非漢字圏の学生への指導の間、漢字圏の学生には当該漢字を用いた語彙や文の読み練習、書き練習の問題をさせ、後で間違いがないかを教師が確認するといった方法を取り、時間調整を行っている。『Vol.1』では3字ごとに練習問題が用意され、それらの解答もあるため、このような学生個人のペースに合わせた指導も行いやすかった。

初級クラスにおける漢字教育の組み込みは、非漢字圏の学生たちからの要望を契機に始めたものであるが、数名の学生に本教材を使用した漢字学習についてのアンケートを実施したところ⁹⁾、非漢字圏の学生だけでなく、漢字圏の学生も「漢字の授業は役に立った」という回答であった。授業の中で、自らの弱点に気づき、漢字学習の必要性を実感した様子の漢字圏の学生もいた。漢字圏とは言え、正確な読みは苦手とする学生が多く、また書く場合の適切な漢字の選択には、語彙の知識も必要となるため、語彙の定着にも漢字学習は欠かせないことを¹⁰⁾、教える側も再認識させられた。

このように、本教材の開発は、「日本語課外補講」初級クラスの授業の改善に少なからず寄与できたのではないと思われる。先行研究においても、漢字学習は、時間的制約等の理由からその大部分が学習者の自学自習に委ねられてきたこと、また、体系的な指導が唱えられているが、基本的には主教材として用いている教科書の課に出てくる順に提示し、簡単な紹介と練習をし、テストで定着を図るという方法を採用している教育機関が多いことが述べられている(豊田1995 p.101)。その理由の一つとして、既存の漢字教科書では、短時間での指導が難しいことも関連しているのではないと思われる。本教材は、富山大学の学生を対象に作成したものであるが、富山に短期間滞在する外国人教師や研修生を指導する日本語教師からも本教材を使用したいとの申し出が数件あった。

今後は、前述の解答ページの英訳の作成およびWeb上の練習問題の作成、また、既出漢字を確認するための索引の作成など、本教材の充実を図るとともに、漢字学習の他に、語彙学習を効率的に行いたいという学生からの要望に応えるため¹¹⁾、将来的には本教材と関連した語彙教材の開発へと発展させていきたいと考えている¹²⁾。

謝辞

本稿は、2006年度日本語教育学会研究集会 第5回 北陸地区における研究発表をもとに、加筆修正を施したものである。同会出席の皆様より貴重なご助言をいただきました。ここに心から感謝の意を表します。

注

- (1) 例えば、石田1989に「漢字の選択は易から難を目指すのが基本的原則であるが、学習者にとって必要度の高い漢字から教えていく。例えば、筑波大学の学生であれば『筑波』は複雑な構造の漢字ではあっても、最初に読み方と意味は教えなければならないし、学習者にとっては日常最も多く目にする漢字なので、決して難しくはない。教科書では、学習者の日常生活で必要度の高いもの、雑誌・新聞での使用頻度の高いもの、なかでも造語力の高いもの、偏や傍になるもの等が優先して提示されている」(p.297)とあるように、一般に日本語教育における漢字の導入は、学習者にとっての必要度の高さという観点で重視される。『留学生のための毎日のKANJI』は、富山大学の留学生を主たる対象とし開発を行ったため、彼らにとっての必要度の高さという観点から、ここでの選定基準を設けた。
- (2) 「山」は日本語能力試験4級レベルの漢字に含まれるため、富山の生活で使用頻度の高い漢字として加えた漢字は、「富」1字となっている。
- (3) 「富」は、富山で生活する留学生のために加えた字である。
- (4) 酒井1994は、非漢字圏学習者に漢字を導入する際、イラストを提示することにより、漢字の定着度が高められたという実験結果を示している。
- (5) 高木1995は、非漢字圏学習者の漢字学習では、字形の認識能力の促進が漢字習得を高めるという実験結果を示している。
- (6) 漢字や漢字熟語の意味や品詞による分類は、日本語学習者向けの漢字教科書や練習問題集で行われている方法である。
- (7) 2006年度前期版では、L20まで英訳を入れている。
- (8) 大北1995では、非漢字圏の日本語学習を対象とした調査をもとに、学習レベルによって漢字学習ストラテジーの使用頻度に差があることが指摘され、学習し始め(1年目)の段階ではフラッシュカードの使用が多かったことが報告されている。
- (9) 2005年度後期に本教材を使用した学生に対し、2006年5月に実施した。方法は質問票の配布回収による。まだ分析のための十分な回答数を得られていないため、本稿では部分的な紹介に止める。今後もアンケート調査を継続して行う予定である。
- (10) 先行研究においても漢字学習と語彙学習の結び付きの強さが指摘されている。たとえば、横須賀1999には「日本語の語彙について考えるとき、それは単に『単語』の問題ではなく、その表記体系である漢字についても考え合わせなければならない。漢字は、文字・表記と語彙との両面にわたる性格をもつからだ。」(p.97)という記述がある。また、石田1989では、テストの総得点から各テスト(聴解、漢字読み、漢字書き、構文読解)得点の寄与を調べた結果から、「漢字の読み方は日本語の総合的な力を反映しており、特に語彙力、聴解力と関連をもっている」(p.299)ことが示されている。
- (11) 富山大学留学生センター「日本語課外補講」で每期実施している学生アンケートの中で、「たくさん新しいことばがあります。どうやったら覚えられますか。」「教科書はわかりやすいですが、ことばの説明がちょっと足りません。」といった語彙に関するコメントが初級クラスの学生から何度か出されている。
- (12) 先行研究において「現在の日本語教育では、語彙は一般的に他の技能と併せて指導されることが多く、単独で体系的に指導されることはない」(横須賀1999 p.112)と指摘される通り、まだ十分な学習、指導体制の整備がなされていない領域である。

主な参考文献

- (1) 石田敏子(1989)「漢字の指導法(非漢字系)」加藤彰彦編『講座日本語と日本語教育 第9巻 日本語の文字・表記(下)』pp.290-312 (明治書院)
- (2) 伊藤寛子・和田裕一(2004)「漢字背景と漢字能力からみた漢字の学習方略」『2004年度日本語教育国際研究大会 予稿集 発表2』pp.124-129
- (3) 大北葉子(1995)「漢字学習ストラテジーと学生の漢字学習に対する信念」国際交流基金日本語国際センター編『世界の日本語教育』第5号 pp.105-124 (凡人社)
- (4) 加納千恵子・清水百合・竹中弘子・石井恵理子(1989)『BASIC KANJI BOOK』VOL.1, VOL.2 (凡人社)
- (5) 国際交流基金・財団法人 日本国際教育協会(2002)『日本語能力試験 出題基準 [改訂版]』(凡人社)
- (6) 酒井順子(1994)「認知科学からみた漢字教育へのアプローチ-学生の自立学習を目指した四段階の『記憶法』による実証的漢字指導の試み-」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』20号 pp.43-61
- (7) 「日本語学力テスト」運営委員会(1999)『語彙別 漢字基準表』(専門教育出版)
- (8) 高木裕子(1995)「非漢字系日本語学習者における漢字パターン認識能力と漢字習得に関する研究」国際交流基金日本語国際センター編『世界の日本語教育』第5号 pp.125-138 (凡人社)
- (9) 高島智美・濱田美和・市島佑起子(2006)「短時間導入型『初級漢字教材』の開発」2006年度日本語教育学会研究集会 第5回 北陸地区 資料集 pp.24-25
- (10) 豊田悦子(1995)「漢字学習に対する学習者の意識」『日本語教育』85号 pp.101-113 (日本語教育学会)
- (11) 横須賀柳子(1999)「語彙及び漢字学習ストラテジーの研究」宮崎里司・J.V.ネウストブニー編『日本語教育と日本語学習-学習ストラテジー論にむけて-』pp.97-116 (くろしお出版)